卒業論文

「地方公務員」志望の大学生における地元意識の変化

――それに伴う地元志向性の変化――

2014 年度入学

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

2018 年 1 月　提出

要約

本論文は大学生となり就職活動を経験した筆者自身が、地元就職について考えたことと「地方消滅」論に基づく雇用創生との間に違和感を覚えたことをきっかけに執筆する。地方からの若者人口流出が叫ばれる中、「地方消滅」論の考えに基づき「東京一極集中」に歯止めをかけるため、「相応の賃金、安定した雇用形態、やりがいのある仕事」を地方で創生していこうとしている。では、地方においてそのような雇用を創れば、若者たちは地元に戻ってくるのだろうか。

この論文は地方公務員志望の大学生において、地元意識の変化を捉えることで、地元意識とUターン就職との関係を探る。ここで地方公務員志望の大学生に焦点を当てる理由は、(1) 勤務先である地方公共団体を自分で選ぶことができ、土地の選択可能性がある (2) 地元にも同じ職種の仕事（雇用）がある (3) 基本的に生涯雇用のためその土地に長く住むことになり、U ターン就職を考える際に、気を付ければならないのが、地方県に大学生にとって魅力的な雇用がないという負の要素であるが、雇用の有無にかかわらず「積極的」に地元就職を希望する人、離れる人の意識を見ることができると考えたためである。また、本論文では、各就活支援サイトの定義に則り「U ターン就職」を「地方生まれの学生が都会の学校に進学して卒業後に地元に戻り就職を行うこと」の意味として使用していくことにする。

調査は地方公務員を志望し、実際に内定を得た大学生 8 人と、自治体職員として働く社会人 1 年目の男性 1 人の、合わせて 9 人に聞き取り調査を行った。また各調査対象者を分析するにあたり、以下の 4 類型を用いた。(1) 大学進学時に県外の大都市地域に出て、そのままそこで職業生活を始める「都市定住型」(2) 一度県外の大学に進学するが、卒業後に地元に近い都市で初職に就く「Ｊターン型」(3) 一度県外の大学に進学するが、卒業後に地元に戻る「Ｕターン型」(4) 一貫して地元内での地域移動をしている「地元周流型」

地元意識の考察の中で、地域移動タイプに関係なく、多くの調査対象者が都会と地元の対比を行っていた。そして多くの語りに登場した概念が「変化していく場所」「変化していかない場所」という対比である。この場合「都会」＝「変化していく場所」に対して「地元」＝「変化していかない場所」という構図である。「変えていきたい」という「やりがい志向」が高まってくる一方で、地元が「変わっていかない場所」という認識が形成

されていくという、真逆な方向への認識の変化は、地元への志向性を低下させる。しかし、地方創生、地方や地方中枢都市の力が拡大している現在、それは都会と地元の対比を生み、どうしても「変化していかない地元」を生んでしまうことになる。また、地方公務員としてどこに就職するのか、どの自治体に勤務するのかという判断には「地元である必然性」が大きく関わっていると考えられる。地元に戻らない「都市定住型」「Ｊターン型」に共通するのは、地元内でのやりがいを見出せなかったため、地元外での就職を決意しつつも、何かしらのかたちで地元とのつながりを残しているところである。「Uターン型」では、いわば地元と自己との間に距離がなく地元と自分を重ねている。また、地元への誘因として特に目立ったのが「地元の友人」「家族の存在」「地元への愛着」であった。そこには若者を地元に引き付ける方向にも、または出ていく方向にも働くという双方向的な側面があることが分かる。

目次

1　研究の背景 1
1.1　問題意識の発端 1
1.1.1　「地方消滅」論と雇用創生 1
1.1.2　内発的な疑問と悩み 2
1.2　研究の目的 3
２　先行研究の整理と定義 6
2.1　定義づけ 6
2.1.1　地方公務員とは 6
2.1.2　「U ターン就職」の定義 6
2.2　若者の価値観と就職意識 8
2.2.1　村々する若者たち　地元化する若者たち 8
2.2.2　地方にこもる若者たち／地方に閉じ込められる若者たち 9
2.2.3　就職する土地と地元意識の関係 10
2.3　公務員を志望する大学生の意識 13
2.4　公務員の志望動機――今と昔の学生―― 14
3　調査概要および結果 16
3.1　調査概要 16
4　各調査対象者の考察 17
4.1　「都市定住型」A さんについて 17
4.1.1　地元の定義　「親や友人がいる場所」 17
4.1.2　「いる場所」から「繋がっている場所」へ 19
4.1.3　小括 21
4.2　「都市定住型」B さんについて 21
4.2.1　地元の定義　「行き慣れた馴染みの土地」 21
4.2.2　地元に感じる「諦めの雰囲気」 23
4.2.3　地元の「自立性」――都会に隣接する意味―― 25
4.2.4　小括 27

4.3　「Uターン型」C さんについて.....27
4.3.1　地元の定義　「帰属する場所」.....28
4.3.2　「変わっていかない場所」が「変わっていく場所」に.....29
4.3.3　「足りていないから帰らない場所」が「足りていないから帰る場所」へ.....30
4.3.4　小括.....32
4.4　「都市定住型」D さんについて.....33
4.4.1　地元の定義　「田舎で落ち着く場所」.....33
4.4.2「地元」にあって「都会」にないもの.....34
4.4.2　地元にあると思っていたものがないことに気付く.....36
4.4.3　「非地元」に「地元」を作る.....36
4.4.4　小括.....38
4.5　「地元周流型」E さんについて.....38
4.5.1　地元の定義　「親と友人がいる場所」.....38
4.5.2　都会志向・地元に拘束されることへの反発.....40
4.5.3　地元は友人と会う場所ではない？.....41
4.5.4　小括.....43
4.6　「J ターン型」F さんについて.....44
4.6.1　地元の定義　「落ち着くことができる帰る場所」.....44
4.6.2　地元の再認識　地元が当たり前ではなくなったとき.....46
4.6.3　ほどほどの「地元っぽさ」.....48
4.6.4　小括.....50
4.7　「J ターン型」G さん.....51
4.7.1　地元の定義　「思い入れのある場所」.....51
4.7.2　将来性のある場所.....52
4.7.3　地元を「非地元」から支える姿勢.....52
4.7.4　小括.....53
4.8　「Uターン型」H さん.....53
4.8.1　地元の定義　「行政としての県」.....53
4.8.2　小括.....56
4.9　「Uターン型」I さんについて.....56

4.9.1　地元の定義　「帰れる場所かつ落ち着く場所」 56
4.9.2　社会人として――前世代として―― 58
4.9.3　小括 60
5　総合的な考察 61
5.1　地元意識の変化 61
5.1.1.　「変化していく都会」「変化していかない地元」 61
5.1.3　双方向的な「地元への誘因」 64
5.2　地元意識の変化と地元志向性、そして地方創生の行方 65
6　今後の課題と反省 67
6.1　今後の課題 67
6.2　あとがき 67